

る關係を有するもので、即ち社會の中に生き、社會に依つて發展するものであるとする。そして社會を以て、單に個人の合意的結合から成立するものとした實證主義的解釋を廢棄する。それで個人の道德化に依つてのみ社會の道德化を期すべきではないから、眞に兒童を道德的に陶冶せんとするには、始めから社會の中に生活せしめて、實行に依つて訓練しなければならぬ。而して最も陶冶的價値を有する社會は即ち、共同社會でなければならぬ。高田(保馬)博士は、利益社會とは各人が任意器械的、一時的に結合した皮相的團體で、各人が他から受けた利益だけ、又他の爲に奉仕する社會であるとして居る。「共同社會」は之に反してテンニースの所謂本質意志から有機的に結合した緊密な社會であり、心からの理解と一致とに基づき眞の共同生活であつて、人類の理想とする社會である。元來自由な教授方法を移入し生徒をして共に作業に當らしめ、學校を勞作共同團體に改造すべきであるとは、個人主義、利己主義に反對して國家本位の公民教育論者であつたケルシエンシュタイナーが夙にその著『勞作學校の概念』の中で、力説し、共同團體の教育的價値を高調したのである。勿論かゝる勞作團體でも、或は却つて團體的利己心を

煽揚するが如き場合もあるから、教師も自から犠牲的奉仕に務むる勞作共同團體の一員となり、常にその精神を保持して指導し、以上の危険を防止することに努力せねばならない。或は又、かゝる團體では、技能の優秀者のみ勢力を振ひ、劣弱者は只之に追隨するのみで、卑屈に陥るだらうと憂へる者もないではない。それは不幸にして事實である。然しながら又、全員が相互接觸の間に、溫和な感情を養ひ、責任感を高め、優秀者が劣弱者を指導し、且つそれ等の爲に奉仕することを領得し練習し得ることは、實にこの勞作共同團體の教育に依つてのみ可能である。而して之が爲には、小學校に於て手工、工作を主とする種々の團體的勤勞作業を課すべきである。蓋し幼兒は最初、抽象的理論的對象には、その注意を集中し、熱心努力し得ざることは明かな事實であり、彼等の眞の興味は、只實際的、社會的、技術的行動に依つてのみ發動するものであるから、之に依つて始めて、彼等の諸能力を陶冶し得るのみならず、又多くの文化財も實行々動に依つてのみ修正され、精練され得るのである。それで手工、工作を中心とし、之に依つて勞作共同團體的に訓練することは、最も重要な教育上の方法的原理であると認められたのである。元來ケルシエンシュタイ

ナ―は、熱心な公民教育論者であり、道德教育論者である。それであるから、従つてその方法原理として訓練を中心とする勞作教育論を強調すると共に、又この勞作共同團體説を高調するに至つたものであることは、彼の晩年の大著『陶冶の理論』に於ても、「社會性の原理」Sozialitätprinzip.を主張して、『一般に陶冶活動に於て期待すべきことは、生徒を共同社會の中で、實行に依つて道德的勇氣にまで教育すべきことである。而してこの共同社會と云ふのは遊戯の社會でなくて、その各員が共同に精神的價值に依つて結合する勞作共同團體でなければならぬ』と説き、更に生徒をこの團體の中に編入し、その自己行動に依つて道德的自己確認を生じ、併せて又、社會の道德化の爲に努力するやう教養すべきであることを論述して居るので明かである。それでケルシエンシュタイナーの勞作教育論は、勞作共同團體を以て最も重要な方法的原理とし、社會を道德化することを以て目的とするので、實に勞作と共同團體と道德化の三者は、彼の教育觀の三位一體的關聯をなし、決して分離すべからざる關係に在ると云ふことが出来るのである。故に或は彼の教育論を以て「勞作に依る訓練」Zucht durch Arbeit.であると評する者があると共に、又訓練に依

る勞作教育」Arbeitsschule durch Zucht. であると評する學者もあるのである。

然しながら團體的勞作は、彼の主張の如く、手工々作の教授の場合にのみ限定すべきものではなく、日常の各科教授の場合に於ても、適宜之を活用し得べきものである。而してこの團體的共同勞作についても、更に全學級兒童が、凡て同時に、同一課題中の同一題材について學習する學級の一齊勞作及び各兒童が、それぞれ小團を形成し、同一課題中の特殊の題材につき、分業的に各方面から探究し、勞作する學級の共同勞作の二種の形式を考へることが出来るのである。

第一、一齊勞作

學級の全員が同一課題につき、その中の同一題材を一齊に研究し、學習する形式であつて、即ち教師もその教授者、監督者たる位地から退いて同じく學級の一員となり、全員と協力し勞作するのである。例へば學校園又は農園の作業の場合の如きはその適例であるが、別に又學級中の全員が隨意に同一課題中の各部を研究して、或者は題材の概念を解説し、他の者はその實例を挙げ、圖形を描き、或はその法則を發見し、又は之に關する文學的作品を紹介する等、各員の協力に依つて一題材の

勞作を完成することも出来る。これは一層相互援助、協同一致の精神を發展せしめ、團體精神の養成に適するものである。但し學級内の児童数が四十名以上の多數に上るときは、亂雑不統制に陥り易いからその實行は困難になる。

第二、分團的勞作

學級内の各児童が、それぞれ小團を形成して學習するのは分團的勞作であるが、更に之を偶然的分團及び自然的分團の二種に分かつことが出来る。

一、偶然的分團的勞作

學級内の児童を適宜數人づゝに分けて分團を形成せしめ、——その人數は低學年では二人、高學年では三、四人乃至五人を適當とす。——各分團毎に「一の組」、「二の組」又はその他適當の團名を附し、各團に組長又は團長等の指導者を設けて、その分團の統制に任せしめ、それぞれ分業的、團體的勞作を爲さしめ、團體毎に全體の責任を取らしめるものである。尙この分團編制には次の種別がある。

1、強制分團

教師が児童の姓名の五十音順又は身長順、もしくは家庭の接近順等に依つて命令的に數人づゝを指定し、小團を形成せしめるもの、又は児童入

學の當初から適宜二人づゝを一組に編制する案もある。

2、自由分團

児童をして、相互に自己の學友中から團員を選択して小團を形成せしめるもの、

二、自然的、分團的勞作

兒童の學業上に於ける能力發達の程度、傾向及び趣味等を觀察して、それぞれ相類似する者又は相調和し易き者を以て適當なる小團を形成せしめ、常に各分團をして自立的勞作を爲さしめ、教師は直接に各分團を巡視して、之を指導獎勵し、その成績を舉げしめるものである。而してこの形式には尙次の二方案がある。

1、分業的勞作

各分團が、同一課題の勞作に當つて居ても、それは同一題材でなくして、各、特異の題材につき自立的分業的の調査研究に當り、その後の生産を個別的に發表し、相互にその價值を全體の關係上から批判檢討し、最後に兒童又は教師が全體を綜合するものである。この分業的勞作形式は、現實社會に於ける實際的事業の經營と、その機構を同じくするので、活氣を呈し、一方に於ては分業的であるが、他方では又協同的であるから、相互援助、協同一致、責任感

等の貴重な精神の教養にも適すると共に、又研究心を刺戟し、且つ能率的であつて、教育的價値が大である。

以上分業的勞作をなす爲の分團は、各科に於て同一兒童を以て構成しないで、教科に依つて、その團員の構成を異にすべきことは勿論である。かゝる勞作に適する教科は、國語読み方、國史、地理、理科、算術、手工等である。

2. 分團的勞作

從來我が國に於て研究された分團教授に近いもので、一學級を二又は三個の分團に編制し、恰かも複式教授の場合に於けるが如く、教師が甲の分團の勞作を直接指導する間は、乙又は丙の分團をして圖書、習字、もしくは他の學科中の靜肅に學習し得る勞作を爲さしめ、次に教師は甲團に靜肅な學習を課して、乙團の勞作を直接に指導するが如き順序を取るものである。

この形式は教授を以て、悉く教師の直接影響、即ち講演、發問等の一齊教式を本質的のものとした舊式教授法の産物であつたので、現時の如き勞作主義に基づく教授法を採用するときには、殆どその必要を認めないと思ふ。

第九章 勞作教育に對する批判

第一節 勞作教育に對する理論的批判

現代に於ける勞作教育の根本思想は、既に述べた如く主として哲學上の理想的自我觀と、心理學上の主意主義との上に成立して居ることは明白な事實である。即ち人間は自己の中心的勢力を以て知情意を綜合し、之を實行する行爲の本質の者であるとし、この根據の上に立ち、兒童をして自から目的を設定し、手段方法を選定して、諸種の文化財を把握し、或は之に加工し修正し、又は自から之を構成することに依つて、勞作體驗を得しめ、以てその意志を實行化せしめ、全人格を陶冶せんとするのが實に、現代勞作教育論の要諦である。然るに以上の思想に對して加へられた**學者、教育者の非難**も少くない。而して、それは決して何等の理由、根據がないのではない。何となれば、凡て新思想が提唱せられ喧傳せられる時には、その内容が一定しないので、種種の偏傾した自己解釋を加へて之を誇張し、唱道する者が少

くないからである。蓋し勞作教育論も最近に至るまでは、殆ど一定の思想内容に到達し得なかつた。而して又、一般に新教育思想の提唱者に共通の缺陷である如く、勞作教育論者に於ても又自己主張の長所のみを誇張し強調して、從來の思想を非難し攻撃したけれども、翻つて自説の短所、缺陷を反省し、補充することを顧慮しなかつたのである。それで勞作教育論に對しても、種々の誤解や、非難が起つたのは當然であると云はなければならぬ。以下この教育説に對する主要な批評を掲げて之を論述しよう。

第一、自由活動中心の傾向

最近に於ける教育革新論の先驅として、最も早く一種の勞作教育論を唱道したものは、ハムブルグの教員ガンスベルヒ F. Gausberg (1871—) 及びブレイメンの小學校長シャーレルマン H. Scharrelmann. (1871—) であつた。その見解に依れば、凡て學校教育の任務は、少年の心中に眠つて居る創造力を覺醒し發展せしめるのに在る。元來、彼等は内的に體驗したもののみを表現し得るのであるから、眞の經驗の集積表現こそ各教授の使命でなければならぬ。それで學校では、兒童に對して十分

自由作文、自由畫及び諸種の手工、談話の機會を與へ、歡喜、愉快の向に、各方面から想像的、構成的表現を爲さしめ、特に自由を尊重して、その個性と創造性を發展せしむべきであると強調し、率先して之を實行したのである。

以上の思想は人格的教育論に近いところがあると共に、又兒童中心で且つ特に自由創造と表現を尊重する點に於て浪漫主義的藝術教育論に近いものである。そして兒童の感觸する凡ての實感を、そのまま、自由に表現せしむべきことを強調する點から、特に**教育的表現主義**と惡評されることになつた。

元來、以上の教育思想は凡て兒童に内在する自然的性能は、悉く善美であるとする教育的浪漫思想にその起源を發したもので、特にその自由表現主義は、却つて兒童の成績をも向上せしめるものであるとして、大に舊教授法の革新を強調し、獨逸の教育界に大なる刺戟を與へたものである。けれども兒童の歡喜、愉快の感情より發する自由活動は、悉く創造性を有し、悉く教育的價值を有するものなりとするのは獨斷であると云はざるを得ない。最近の獨逸に於ける『凡てを兒童から』

Alles vom Kinde aus. と云ひ、米國に於ける『兒童中心の教育』Child Centered education の

如きは、いづれも浪漫思想に出づるものであつて、この自由表現主義と相通するものがあり、決して眞の勞作教育主義であると見ることには出來ない。我が國に於ても、明治、大正時代に於ては、兒童をして只自由活动を爲さしむれば、よく教育の目的を達し得るが如く誤想し、所謂**自由教育**、**活動主義**等の名稱を用ひ、或は又**發表主義**と稱して兒童をして談話、作文、圖畫に於て、自由發表を爲さしめさへするときは、即ち教育の効果を擧げ得るが如く唱道したものが少くなかつた。けれどもこれ等は多くは米國教育法の模倣移入であつて、眞の教育學的根據を缺けるものに過ぎない。然るに多數の參觀者は只兒童の冗舌多辯の發表や、無用無意味の活動にも、ひたすら感嘆したので一時勢力を得たのである。然しながらこれは皆勞作教育主義の外観表面のみを模したもので、未だその眞髓、中心の思想を把握せざる淺薄な教育家の妄動に過ぎなかつたものである。ルーデは之につき、『凡て價值ある人間を作るところのものが、既に兒童の天性中に存在するから、教育では只それ等を解放することを要するのみである。従つて教師は、彼等の背後に退き自づからそこに生ずるもの、成長するものを期待するより他に、最良の仕事はないとするの

は**教育的表現主義**であるがそれは迷誤である。彼等は只自然的所與のみを甚だしく誇張し、**陶冶的勢力**を輕視するものである。以上の根據から或は又家庭的環境の感化を遮斷し、幼者を自然の發達に委かせんとする者もある。勿論兒童の内部には、その種類と程度こそ異なれ、種々の天性能力が潜在するのであるから、それ等は自由に發展せしむべきである。けれども、それ等の力も自然と文化との環境の中に發展せしめなければならぬ。教師の任務は、即ち兒童をしてこの自然と文化とに誘導し、彼等の上に價值ある陶冶財を作用せしめることである。凡て不健全であり、虚偽に成長するものは、悉く之を根絶し芟除しなければならぬ。然るに、凡てを兒童からと云ふ如き標語は、動もすれば全陶冶財は、その選擇に關しても、之を採擇する時期に關しても、只兒童の傾向に従屬すべきであると解釋されるので疑はしき誇張を包含する』と非難し、ケーンも又、『現代の教育革新家には二種の極端の者がある。即ち陶冶財の取扱に於て、一方は客觀的方面を他方は主觀方面を強調するものである。前者は文化財の概念を重視して、特に文化科學的教授原理を力説するが、之に反して後者は兒童の内部に存する創造性の覺醒、發展のみ

を強調する。而して種々の文化財の如きは、單に手段たるに過ぎないものであるとし、傳統や、歴史に無關係の新文化を構成し、新人を育成して新時代を作り出さんとする。かゝる見解は、全く客觀的精神の事實及びその發展を知らざる盲目者の妄動である。』と論斷して居るが、共に妥當な批判と云ふべきである。

要するに以上自由活動主義は、學校を以て只兒童の現實生活の爲に教育する場所であるとし、兒童の心理的條件に適合すれば可なりとする心理主義の教育である。固より心理學は教育學の方法的基礎であるから、小學校教育上の凡ての考案は、兒童の心身の發達に適合しなければならぬもので、即ち**兒童適合性の原理** *Kindergemässheit* は最も重要なものである。けれどもそれは重要な一原理であり、一の條件であつて、別に他の原理、方法の並立を許容しないものではない。それで教授に於ては、以上の兒童適合性の他に、どうしても又各教科固有の特徴に應じた取扱を要するもので、**教材適合性の原理** *Stoffgemässheit* の原理を要するのである。然るに、兒童の自由活動、自由表現のみに委かすれば、彼等の構成能力、創造性、人格を發展せしめ得べしと考ふる如きは、恰かも水源の貧しい泉から、幾條かの河川

を導いて、滾々たる水流を得んことを希望する者の如く、固より重大なる迷誤である。

第二、身體的技術中心の傾向

過去の教育に於ても、高等感覺器官、特に目と耳との練習が精神生活の發展の爲に極めて重要な意義を有することは之を認めて居た。直觀教授の起源は實にここに在つたのである。けれども尙、手を働かし觸覺、筋覺を發達せしめることが教育上更に重要な意義を有することを忘れて居た。然るに第十九世紀の末葉に至り、國民經濟上の理由から手の教育の必要を力説する者が多くなつたと共に、更に、手は發動的に作用して物體との接觸、把握に役立つのみか、併せて又、發表と構成とを司るので、認識及び意志の陶冶の上にも大なる意義を有するものであると云ふ心理的理由を解するに至り、ジエンケンドルフ、バプスト、ヘルテル、シエラー、ザイニッヒ等の手工教育家は、大に作業に依る手の教育を力説したが、特にケルシエンシナイナも大にこの説を強調した。それで或は、**手業主義**又は**技術的勞作教育論**とも稱せられたのである。勿論手の熟練に依る技術は、現代文化の中でも重要な地位を

占めるもので、嘗てヘルバルトが云つた如く、『手は言語と共に人間をして他の動物以上に高めしめる爲に、光榮ある地位を占めるもの』であるから、手の熟練の教育は決して等閑に附すべきでない。然しながら以上諸教育家の手業的教育論を強調したのは、従來の教育が偏知主義であつたのに對する一種の反動的運動であると見るべきである。ヘイワング Hywang は之を評して、『手の熟練の教育は必要であつても、それは只精神の教育の補充たるに過ぎないものである』と云つたが、頗る肯綮を得た批判であると思ふ。要するに以上の身體的、技術的勞作教育論も又甚だ偏傾した教育論である。元來、勞作教育の起源は近時の經濟的、社會的情勢に基づくものが多く、既に述べた如く近代の歐米に於ては、器械工業が大に發達し、物貨は悉く大量生産に依つて製出せられ、各國互に國富の發展の爲に競争することになつたので、之が自然の結果として家内工業、手工業は全く滅亡に瀕し、國民の眞の創造力、生産能力は減退するに至つた。それで之を復活させることは國民一般の職業生活の爲にも、勤勞習慣の養成の爲にも大に必要であるとし、こゝに手工教授運動が起つたのである。故に勞作教育の提唱された當初に於ては、勞作教育と手

の熟練の教育とは、全く分離すべからざるが如き聯絡を有したもので、従つて『手業』、『手工』、『工作』等種々の名稱をさへ生ずるに至つたのである。勿論現代の文化生活に於ては、手の熟練、技術も大に必要である。けれども元來、技術、熟練とは、精神的勞作の結果を實際生活に適用せるものに過ぎない。然るに技術のみを誇張して之を過大に評價し、勞作教育は即ち手の熟練の教育であると解するが如きは、所謂盾の一面のみを見る大なる偏見であると云はなければならぬ。

次に以上獨逸の教育社會に於ける誤解と好一對の誤解が我が國の教育社會にも存する。それは勞作教育とは、即ち全身的勤勞、筋肉的勞働の教育に限ると解することである。固より勤勞、勞働は美德である。而して現時の學校教育は、偏知教育に傾いて居ることが多いので、在學中の兒童生徒は勿論、既に學を卒へた青年子弟も、多くは精神的職業に従事せんことを望み、自から進んで勤勞に服せんと欲する者は甚だ少い。かゝる弊風を除かんが爲には、夙くから全身的勞働を課して勤勞に慣れしめ、以て職業を愛好し、勤勉、忍耐、努力の精神を教養すべきであるとする。吾々も勿論、かゝる實際教育方針に賛同するものである。然しながら、それは勞作

教育の本質的意義から發展した主張でなくして、現時の社會的情勢の觀察から歸結した一個の經驗的教育方針たるに止まるものである。一時の世相に動かされた經驗的職業教育方針や、悟性の陶冶と伴はない盲目的勞働は、眞の教育的價値を保有し得ない。特に自己の勞作について、何等の自覺的目的、計畫を有せず、只興味に従つて活動するならば、それは勞作でなくして遊戯たるに止まるものであるし、之に反して教師の嚴格なる指揮命令に恐怖を感じて、只無意味に勞作するのみならば、それは恰かも奴隸の勞役に近いものである。勞作は必ず、明白な目的と確實な材料、方法の自覺に基づかなければならない。勤勞教育は必ず實際的悟性の陶冶を伴ふべきである。

第三 感情陶冶輕視の傾向

次に從來の意志教育に於ては、豊富な感情陶冶を企圖しないで、只實行を強制し又は狹隘な範圍に於て感情を刺戟し、之に依つて直に實行的態度の育成を期したのである。それであるから藝術教育の如き方面とは、全く無關係のものであると解せられて來た。既にカントは美的體驗を以て、純粹な無關心的快感であるから、

従つて吾人の欲望や、執意とは沒交渉のものであると高唱し、シラベンパワーも又美は事物の無意志的直觀であると云つて居る。故に意志陶冶を主要目標とする勞作教育では、自然的に感情陶冶を重んぜず、従つて美感の養成の如きは之を輕視するが如き傾向に陥つた。勿論一部の勞作教育論者中には、大に藝術教育運動に共鳴して、最初から自由表現主義を中心とした教育家もあつたけれども、それは極めて一小部分の範圍に止まり、他の有力な勞作教育論者は皆身體の技術的訓練と意志の陶冶とを目的として、感情陶冶の如きは之を顧慮しなかつたのである。かのケルシエンシュタイナーの如きも、嘗て『美的陶冶は決して道德的結果を將來せず』と論じて、殆ど感情的方面を重視しなかつたのである。然るにその後、勞作教育思想の發展に伴ひ、意志の陶冶は自己活動に依つて達せらるべきものであるから、出來得るだけその機會を作り、自覺ある自發活動の反復と、その結果の反省、批判を爲さしむべきであると論せられやうになつた。最近の藝術教育でも又、從來の如き受動的觀照中心の方針から轉向して、出來得るだけ兒童の精神に内在する創造性と生産的能力を解放し、自發的に活動せしむべしとする。即ち吾々が藝術的作

品を主として知的に眺める場合、所謂觀照に於ては勿論、尙之を感情的に眺める鑑賞の場合でも、吾々の内部には必ず或種の自己活動を要するので、全然受動的態度のみではない。即ち鑑賞享樂には主觀的興奮と共に、又その作品に對する把握と内的構成とを要するもので、必ず多少創造再現の過程が包含されなければならぬとする。それで藝術教育に於ても、勞作教育に於ても、共に大に創造性、生産性の發展を企圖するのであるから、この兩者の教育論には共通の方面があると云ふことが信せられるやうになつた。けれども藝術の關するところは美的領域、所謂假象の世界であるから、主として感情的創造のみであるが、之に反して勞作の關するところは、この美的領域の他に、認識及び社會的領域即ち事實世界及び實踐世界をも包含するので頗る廣汎であると云はなければならぬ。故に藝術教育と勞作教育とでは、その活動領域の廣狹を異にすることは明かである。然しながら兒童の精神に内在する自發的活動性を覺醒して、その創造的意志を向上せしめんとする點に於ては、兩者の教育論には自づから相接觸するところがある。然かのみならず、藝術的構成能力、創造性に富める意志の發展は、勞作教育の根本原理からも最も

要望するところであるから、勞作教育に於ては決して美的感情の陶冶を輕視し、閑却すべきでなく、却つて藝術教育の方面にまでその主義を進出せしめなければならぬとせられて來た。シャイブナーは勞作と感情につき、勞作は最初から勞作氣分を生じ、その經過の間には、勞作歡喜を伴ひ、その進行の阻害される場合には勿論不快感を生ず、力の感情従つて自我感情を伴ふのである。要するに勞作は最初から終局まで活動感情を伴ふものであると述べ、勞作教育が決して感情陶冶に無關係でないことを論じて居る。

然しながら以上美感及び活動の感情以外に於ける社會的、人道的、道德的、感情の涵養に就ては、從來の勞作教育の干與するところは、決して多いと云ふことは出来ない。それであるから、ヘイソングは、その著『勞作學校とは何ぞや』の中に於て、勞作教育の缺陷を指摘して、

『勞作學校では悟性的認識の練磨を中心任務とする。それでこの方面では、優越な進歩的結果を見ることが出来る。然しながら心情の價值、精神の深奥、内的生活に關してはその本質上、全く觸れることが出来ない。』

と痛論したのみでなく、尙

『勞作學校は精神の認識的方面、意欲的方面の練磨を主とするが、感情には向はないから心情を破壊し、腐敗せしめる』

とまで極端の非難を浴びせて居る。固よりこれ等の攻撃は、宗教中心の教育論者に多いので、妥當を缺くものが多いけれども、一般に勞作主義の學校では、意志の陶冶及び知性の具體的練習に傾くから、感情陶冶を輕視する傾向が多い。而してそれは米國主義の自學教育に於て最も著しい傾がある。勿論米國諸學校に於ても、藝術的方面の教育については、その勞作主義と聯結して相當の陶冶を施すことを怠らない如くである。けれども一般に、人道的、道德的感情を人生の最も内奥から覺醒し、陶冶せんとすることを閑却して居る傾が多い。概して米國の國民が敏活で氣力に富み、知能優秀の士を多く輩出しても、一般にその氣品が低く、歐州諸國民から眞の尊敬を博し得られないのは、實にこの感情陶冶の缺陷が、その一因をなして居るのであらうと思ふ。かくの如くであつては、勞作教育がヘイワングの所謂精神の深奥の力、内的生活の貧困を來たすべきことは疑ひなきところであるから、

勞作の教育に於て特に留意しなければならぬと思ふ。これ著者が勞作の原理の他に、體驗の原理を並立せしむべしとする所以である。

第四、知的陶冶の缺陷

勞作學校では、一般に兒童の意志の行動化の方面のみを重視するので、只彼等の興味の赴くところに任せ、却つて之が動機となるべき觀念や、判斷、見識の根柢となるべき純粹な知的生活、現實上方面の教養を怠ることに陥り易い。固より人生に於ては實行行動は單なる觀念上の知識、實行せざる知見よりは重要である。けれども實用以外の知識も陶冶の上に於ては重要であり、尙、實行を生ずるところの動機は一層重要であることを認めなければならぬ。徒らに皮相淺薄な動機に支配せられて、輕率に行動するやうな意志や、單に快、不快の感情に基く反動のみに依つて行動するが如きは、決して現代社會生活の要求するところの人格ではない。又勞作教育では、一般に研究的態度、自立的意志を要求するが、教材の多量、知識の豊富は決してその望むところではないとし、知識は只精神を練磨する材料として、目的に對する手段に過ぎないものであるとする。けれども現代人の直面する政

治、法律社會、經濟等に關する生活は、いづれも皆複雑な形式であるから、決して各人をして素朴な感情や、興味を標準とした反動的行動を以て之を解決することを許さない。却つてこれ等の問題に對する豊富な觀念と明晰な判断に、依つて之を解決し、各自の主觀的感情を克服し、興味生活とは甚だ縁遠い見解に從つて目的の實現に邁進することを期せなくてはならない。換言すれば暗黒な感情、氣儘放縱な小兒的興味の爲に支配される衝動に從つて行動しないで、北斗星の如く常に人生の行途を照らす悟性の光に從つて行動するやうに指導しなければならぬ。悟性に依る正しい判断は、必ず客觀性を有する規範に基づくものである。固より感情生活を豊富にすることなしに、意志を強固ならしめることは出来ない。けれども重要な知的内容の把握と知見の陶冶なくして、健全な情意を養成せんとすることも、同じく不可能であると云はなければならぬ。眞の意志教育は只兒童の皮相淺薄な動機に依る行動に信賴し、その自由な發展に待つべきではない。概して從來の教育は、教授上の實質主義に傾き、徒らに多量の知識、内容を兒童に注入するに努めて、その記憶を強制する弊害が多かつたから、認識上の勞作主義が、之が反動

として大に唱道されるに至つたのである。けれども或は知的材料の分量を著しく減少して、却つて悟性陶冶の機會を少からしめたり、或は又、知識、内容そのものの確乎たる把握保持に努力しないで、單に之が空虚な表現や、プロジェクトとしての客觀的構成にのみ努める如きは、決して妥當な教育法であると云はれない。

第五 形式陶冶主義偏傾

勞作教育が偏知教育に對する反動として起つたものであることは、歴史的にも明白な事實である。従つて教材そのものよりも、之を追求せんとする兒童の努力活動を重視し、知識内容の把握よりも、之を收得し構成、創造する方面を重視するに至つた。それで自然的に形式陶冶主義に偏傾した嫌がある。蓋し第十九世紀は教材萬能の實質主義が支配せる時代であつたので、學校教育は知識の注入に汲々として居たのである。けれども自己活動的、自立的能力、實行力、換言すれば生命の伴はない知識内容は只人生の重荷たるのみで、人格を陶冶し、生活に役立てる上に何等の價值も有たない。實に勞作教育主義は「知識は力なり」の第十八世紀以來の信條や、第十九世紀に於ける教材萬能主義の教育觀や、教育學上の實質主義の惡魔

に對する開戦であり、兒童の自己活動諸能力の解放、選擇、決行の意志の宣揚であつたのである。文學者で且つ哲學者であつたレッシング G. E. Lessing (1729—1781) の有名な言葉に、次の如きものがある。

『神がその右手に永久の眞理と認識を保ち、左にこの眞理に向へる努力を持ち、而してその孰れかを選択せよと余に宣ふならば、余は左方に向ひ、謙遜にひれ伏して申さん。『父なる神よ、どうぞ私には努力を賜はれ。永久の眞理は、只貴方のものであるから。』』

實に吾々の人格の陶冶の爲にも、生活の爲にも重要なものは、多量の死んだ知識の堆積ではなくして、少量の内容でも、之を有効に利用し得る能力、意志、生命の力である。ヘイワングも云つた。『能力を練習することを努めないで、只教材を授與して知識のみを増さんとするのは、恰かも病人の體力を回復せしめることに努力しないで、之に金錢を與へんとするもの、如くである』と。固より勞作教育主義は過去に於ける過重なる教材注入教育法や、知識萬能觀に對する反動運動であつたのみならず、その思想的根據を主意主義に有するものであるから、形式陶冶主義であるべき

ことは當然である。けれども餘りに極端に教材を制限し、内容を減縮し、之が選擇批判の如きは問ふところでない。只兒童の能力を練磨すれば足るのであるとするならば、それは又過去に於ける『形式陶冶のドクマ』『一般陶冶の幽霊』として、近代心理學が實驗上から排棄したものを、今尙教壇上の偶像として禮拜する狂信家であると云はなければならぬ。然かのみならず、内容と形式とは元と一元的のものであるから、内容を輕視して、只能力のみを練磨することは不可能である。

第二節 勞作教育に對する實際的批判

第一、ミュンヘン教育家の非難

勞作教育に對しては、實際的方面からも種々の批判がある。就中、この教育の最初の試行地であり、又この教育の首唱者として最も有力な教育界の偉人と稱せられたケルシエンシュタイナーの郷土に於ても、次の如く痛烈な非難が擧げられたことは、識者の最も意外とするところであらう。即ちミュンヘンのモリソン教授 Morison 及び同市國民學校教員會長グートマン Gutmann、國民學校長ウキゲ Wigge の

諸氏は、嘗て左の如き論證から、ケ氏の勞作教育に對して痛烈な反對意見を發表した。

1. 從來の學習學校は不可であると云つても、その結果として獨逸の政治的經濟的隆威と大なる文化を産出したではないか。之に反して、勞作教育は果して何ものを齎らさんとするか。吾々は未だその結果成績の片鱗をも知らない。
2. 「よく讀み」、「よく書き」、「よく計算する」ことは、文化要求の勞作であるから、實際的の文化を生ずるに至らしめる。
3. 新教育の學校では只實際的價値のみを尊重して、精神的價値を尊重せず。従つて眞の道德的教材も手工の背後に退けられ、學校教育の道德化は輕視さるやの嫌が多い。
4. 新教育學校では只器機的、身體的作業を重視し精神的活動を輕視する。
5. 新教育學校では直接に功利主義を輸入する。
6. 新教育學校は學校經費を増大せしめる。
7. 兒童數の多き學校では、かゝる教育法を實施することは到底不可能である。

8. 今日の教員はかゝる教育法を實施するやうに養成されて居らぬ。
9. 從來の教授要目には、豫定の教材が充實して居るから、かゝる教育法の實行は不可能である。
10. 尙モリソン教授の見るところでは、シュンヘン市に於ける學校では、ケ氏の革新實行以來、兒童は只遊んだり跳んだりして、眞面目に學習する風を失つた。多大の經費と時間とを費して、結局の收得は只皮相淺薄と有害の教養のみであつた。

II. 又國民學校長ウキツゲの見るところでは、ケ氏の所説は教育社會に新舊二派の對立を教唆したもので、一種の煽動家的態度と見るべきである。

第二 ルーデの批判

又獨逸の國民學校長、市視學の經歷を有し、教育に關する著作家、評論家として著名なエルンスト、ルーデ E. Rude は、その著『學校の實際』Schulpraxis, (1924, GAufl.) の中で、「勞作教授」Arbeitsunterricht, の長所について、左の如く記述して居る。

I. 勞作教授は兒童の勞作衝動、創造衝動を發展せしめる。それは實際生活上多

量の知識を有つよりも重要である。生産能力の育成は人間に於ける最大の力を發展することである。

2. 勞作教授は言語の他に、文化の進歩の爲に最大の効果を奏した手を練習する。
3. 勞作教授は直観、測定、比較に依り目を教育する。蓋し目は手の爲に役立つ。一部の陶冶は又他部の陶冶に影響する。
4. 運動感覺、觸覺及び筋肉感覺は、精神生活に對して重要な意義を有つことは、近時の心理學者の認めるところである。
5. 従來の學校では、兒童は著しく自己感情を抑壓され、従つて僅少な發展をなし得たに止まるが、新しい教育では全然別異の感情を長じ、自己の能力、手の使用に於て歡喜を生じ常に緊張と完成に向はしめる。
6. 勤勉、忍耐の教養に適す。
7. 理論と實際の正しき關係を認め、觀察と熟考とに依つて、勞作及び他の問題について研究するやうになり、勞作と考案とに導く。
8. 心身を健全にする。

9. 工作では言語に依つて把捉することの出來ぬ比較及び推考を必要とする。而して手に依りて生ずる理解は精神的理解を媒介する。

10. 従來輕視された手細工は、文化財の評價に於て再びその光榮ある地位を回復すべきである。作業及び勞働者の尊敬は社會的調和を來たす。

11. 優良な勞働者の養成は、國民の經濟的競争を有利にし、文化的勢力の増進を來たす。

12. 小學校兒童の大多數は、勞働階級の子女であるから、卒業後には又多く勞働に従事するので、工作教授は學校と家庭の連絡を密にする。

以上兩者の批判は、共に勞作教授を以て従來一般に獨逸の教育社會に行はれた手の熟練の教育、即ち手工又は工作教授と同視して居る教育家の論議であるから、いづれも狹義に失し、決して適切な批判とは云ひ得ない。それで勞作教育の本質を正しく解釋すると共に、その理論的批判を考察し、併せて又勞作教育の限界を知ること、はこの教育上に於て根本的に必要であると云はねばならない。

第三、綜合的批判

勞作教育に對する學者、實際家の批判中、多數の見解であつて、然かも正鴻を得た最も穩健と思はれる重要な思想の要項を次に拔萃する。

一、**勞作主義は教育上絶対唯一の原理ではない**。勞作教育主義は現代の教育學に於ては、哲學的、心理學的根據の上からも、又實際上からも最も重要な指導的原理の一であることは明確な事實である。けれども之が爲に、他の如何なる教育原理の並立又は追隨をも許さないと云ふ絶対唯一の最高原理でないことは、既に述べた如くである。即ちこの原理を認めるには、當然個性原理と自由の原理を承認することを要するのであるが、別に又權威の原理、體驗の原理、社會性の原理も、之に並立することを要するのである。元來教育活動は複雑にして多岐であるから、唯一の原理のみで凡てを包攝し、實行し得べしと信するならば、それは實に狂信に近い誇張と云はなければならぬ。それでヘイワングも、『勞作教育は教授法の全部 Das Lehrverfahren でなくして、重要な一個の教授法 Ein erfahren に過ぎなく』と評した。固より之を『教授法』のみ見るのは狹隘な見解であるけれども、教育法の全部でなくして一部であるとしたのは、妥當な見解である。吾々は決して勞作

教育法以外に、他の教育法なしと信するものではない。近時、教育學上の所説を主張するものは、東西共に自説の長所のみを甚だしく誇張して、その反面に於ける缺陷を考慮しない傾向が頗る強い。遺憾ながら、吾々はこの勞作教育運動に於ても、同様の傾向があつたことを認めざるを得ないのである。

二、**勞作主義は形式陶冶主義に偏するので、重要な基礎的知識の把住をも等閑に附する缺點が多い**。勞作主義が形式陶冶主義に立脚する教育原理で

あることも又明かで事實ある。それでこの原理にのみ基づく教授法に依據するときは、往々考案、創造、構成の諸能力の陶冶に偏し、特に自己發見、自己檢討を重視するので、動もすれば國民生活上最も**重要な基礎的知識の練習や、根本的事實の記憶**をも等閑に附し、半解の知識、不確實の事實を基礎として、主として批判、評論に走らんとする傾があるのは、東西共に一様の傾向で甚だ遺憾と云はなければならぬ。ドクトル、ケルン Dr. Kern は近時獨逸の教育雜誌、『教育』に於て、勞作教授の弊害を次の如く痛論した。『近時の兒童生徒が、最も必要な事實的知識に缺乏せることは、社會の各方面に於て悉く非難するところである。固より現時の兒童は勞作主義

の教授に依り、判断力、思考力、従つて又、批判力を教養されて居ることは事實であり、又その長所である。けれども如何に巧妙なる批判、判断にも先だつて、その根底に**確實な事實的知識の必要なこと**は、何人も異論を挿むことは出来ないことである。試みに今日の中學生に、古代ローマ人の精神生活や、フリードリット大王の政策を評論せしめるならば、彼等は皆喋々として之を論評するであらう。然しながらもしも更に進んで、彼等に大王が關係せる種々の内治、外交上の事實や、古代ローマの最も著名な人物及びその事蹟等を發問するならば、多くは皆支離滅裂で、事實も、年代も、誤謬に充ちた答辯を繰り返へすのに、何人も苦笑を催さざるを得ないであらう。これ皆近時の勞作主義中心の教授法の責任である」と。蓋し勞作主義は自我に信賴せしめることが頗る強く、何事も、自力を以て之を解決せしめんとするので、その根柢には主意主義が横溢して居ることは勿論であるが、又合理主義的傾向も頗る強い。それで動もすれば、自己以外に存する外部の權威を顧慮せざらんとする氣風を生ずるに虞れがある。それで自己檢討、自己批判、自己活動の力は之を有して居ても、**既成の事實や、基礎的知識を尊重し、反復練習に依つて、確實に之を把握せん**

とする忠實性や、他の權威に對し精神を集中緊張して、その報告教訓を受容し、之に歸依せんとする信頼性を發展せしめず、却つて練習に依つて心身の作用を器械化するが如きは低級の活動に過ぎずと信じ、之を輕侮するやうな傾向を有して居るが、それは大なる迷誤である。大なる器械化なくしては決して大なる勞作は出來ない。自由精神的勞作の首唱者ガウチツヒさへ云つた、

『**嚴格な器械化なくしては、眞の勞作主義は決して行はれない**』と。

三、兒童の發達に關する限界

勞作は自己活動であり、目的の自己設定

であり、材料、方案の自己選定であり、自己決行でなければならぬから、兒童が餘りに幼弱な間は、眞の勞作教育を行ふことは出來ない。即ち幼稚園や、小學校の初學年に於ては、兒童の自己活動にのみ委かして置けば、彼等は只遊戯をするのみで容易に眞の勞作をするに至らない。それでかゝる時代に於ては、所謂遊戯的作業、即ち遊技の如きものを爲さしめ、漸次に援助を與へて、それ等の間から眞の勞作に進展せしめ、又は指導、勸告、命令に依り、學習の方法を教示して進歩成功の快感を味ひ、眞の勞作に向ふべき知見と勇氣とを教養しなければならぬ。ヂースデルエツヒ

は云つた。『年長者には根據を示し、幼年者には力を示せ』と。力は即ち權威であり、命令である。幼年兒童が教師の命令を喜び、よくその指導に従順なのは、即ち勞作の自然の順序を示すものと云ふことが出来る。それで漸次に年長に進むに従ひ、出来る得るだけ、自己活動に依る眞の勞作を多からしめなければならぬ。こゝに勞作の第一限界がある。

四、教材の性質に依る限界

次に勞作は教材の種類、性質に依つて多少の制約を受けることを免れない。蓋し各種の教材には、それぞれ特有の精神構造があり、排列がある。それで兒童に勞作を課するとしても、自然的にその制約を被らざるを得ないから、勞作の性質に於ても、程度に於ても、又その教育的價値に於ても若干の相違を生ずることは當然である。例へば數學問題に對する勞作と、植物の實驗に於ける勞作と、圖畫、唱歌、習字に於ける勞作では、各、その對象の相違に依つて又勞作活動にも相違を生じ、決して同一になり得ない。概して理論的教科と精神科學的教科と、技能的教科とは、大にその思想活動の方向を異にして居るが、特に技能的教科では、最初は一定の規範に依據せねばならないことが多いから、自づ

からその規範に模せんと努力するのが即ち勞作になる。それでシャイブナーは、教授の對象に依つて勞作の型式を 1、直觀的對象、2、言語的對象、3、思考的對象、4、表現的對象の四類に分類したのであつた。教師は、よくこれ等各教材の特質を考察して、兒童をして各適當な勞作を爲さしめなければならぬ。

五、教材の分量に依る限界

次に又勞作主義は教授上の教材の分量如何に依つて當然その制約を受くるを免れない。即ち一定期間の教材の分量が多ければ、如何なる教師でも、その教授の進行を急がなくてはならないから、その結果兒童をして適切な勞作を爲さしめることは出来ない。従つて教材の分量と兒童の勞作とは、自然的に反比例的關係を有つやうになる。否らざれば多大の家庭宿題を課して、兒童の負擔を過重にするやうな虞れを生ずる。それで獨逸の勞作主義小學校では、各學年又は各學期に於ける教材の配當には顧慮することなく、只四箇年間に基礎學校所定の教材の教授を終了し、八箇年間に國民學校所定の教材の教授を完結すれば可なりと豫定して居るところがあるのは當然と云ふべきである。然しながら我が國の規行制度では、國定教科書を使用しなければならぬ

新教育樹立の道標

文學博士 乙竹岩造先生著

日本教育史の研究 第一輯

廣島高師教授 稻富榮次郎先生著

教育作用の本質

JOBK 教育部長 西本三十二先生著

學校放送の理論と實際

東京高師教授 樋口長市先生著

生活教育學

菊判洋裝函入
紙數五七六頁
定價五、二〇
送料、二二

我が國學界の泰斗たる乙竹岩造博士は、さき
に我が國文化史上大なる大書として學界を驚
かせしめたが、今又この大書に、それら史を驚
たる事象に關し、更に研究考證を重ね、筆を新
たにして史料の精査を遂ぐ。

菊判洋裝函入
紙數三二〇頁
定價二、六〇
送料、一四

本書は實際教育の廣き體驗と深き哲學的教養
とを併せ有する著者が、透徹の理論と尖銳の
思索とを傾けて成れる教育作用の本質論であ
る。素樸な著述を破つて著者の獨創的論議の
下に、傳統の渾然大成すべき教育學體系を輪廓づ
ける貴重なる書。

菊判洋裝函入
紙數三〇〇頁
定價二、二〇
送料、一四

かつて著者は奈良女高師の教授たり、現在放
送事業の第一線に立つて活躍し、又我が國學放
送の創始者でもある。本書は其機構に關し、徹
底解説したものである。學校放送は利用し、徹
する人も、先づ本書を讀んで其態度を決せよ

菊判洋裝函入
紙數三二六頁
定價二、二〇
送料、一四

生活教育學は「生命」を自然の所與とし、それ
より出發してその顯現である生活の活動本
具の方針たるその現地に向つての活動本
である。學校の教育の理論及方法論とする學
科生活指導に立たねばならぬ。家庭も社會も皆こ

東京市神田區 目黒書店 振替口座東京 九〇八二番

目黒書店出版圖書目錄 [昭和十年九月改訂]

【教育・教授】

教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第一卷第一輯)	三、〇〇	吉田熊次先生著	本邦教育史概説	四、五〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第二卷第一輯)	三、〇〇	吉田熊次先生著	教育大意要義	二、〇〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第一卷第二輯)	三、八〇	吉田熊次先生著	倫理學概論	四、五〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第二卷第二輯)	三、八〇	吉田熊次先生著	教育史綱要	二、〇〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第三卷第一輯)	三、二〇	吉田熊次先生著	教育學綱要	二、〇〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第四卷第一輯)	三、〇〇	吉田熊次先生著	陶治と價値	三、八〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第五卷第一輯)	三、〇〇	吉田熊次先生著	教育學説と我が國民精神	四、三〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第六卷第一輯)	三、〇〇	吉田熊次先生著	大日本教育通史	四、四〇
教育學研究室編輯	教育思潮研究 (第七卷第一輯)	三、〇〇	吉田熊次先生著	現代の教育哲學	二、六〇
精神科學會編輯	精神科學會 (年四回) 各八〇	八、〇〇	海後宗臣先生著	ダイルの哲學と文化教育學	三、三〇
教育談話會編輯	教育談話會記念講演集	四、〇〇	海後宗臣先生著	リットの文化哲學と教育學	二、五〇
吉田熊次先生著	現今教育學説の根本思潮	三、五〇	村上俊亮先生著	ヨナスの哲學と教育學	二、五〇
吉田熊次先生著	西洋教育史概説	四、五〇	伏見猛彌先生著		二、五〇

飯田三原著	我國に於ける郷土教育と其施設	二、五〇、二四	福島政雄先生著	教育原理概説	二、三〇、二四
伏見猛著	道徳價值論	五、〇〇、三三	福島政雄先生著	歐洲文明と教育史跡	二、〇〇、三三
木村伊勢雄先生著	近世教育思内存在觀の研究	二、八〇、二四	福島政雄先生著	希臘教育史	三、六〇、三三
由良智次先生著	經驗的及び先驗的研究	四、五〇、三三	福島政雄先生著	ペスタロッチの根本思想研究	二、四〇、二四
由良智次先生著	文化教育學の新研究	四、五〇、三三	福島政雄先生著	隱者の夕暮増補改訂版	一、八〇、三三
乙竹岩造先生著	日本庶民教育史	三、五〇、〇六	佐藤龍治郎先生著	現代教育思潮批判(増補)	二、〇〇、一〇
乙竹岩造先生著	日本教育史研究 第二輯	五、二〇、三三	佐藤龍治郎先生著	三大教育學說の約説と批判	三、三〇、一四
佐々木秀一先生著	教育の方法學に就いて	品切	佐藤龍治郎先生著	自發性の原理の展開	一、九〇、〇八
樋口長市先生著	我國現時の三大教育學說	二、八〇、二四	佐藤龍治郎先生著	教授方法の藝術的方面	一、六〇、三三
樋口長市先生著	歐米の特種教育	二、四〇、二二	佐藤龍治郎先生著	國民教育の中心問題	一、五〇、一〇
樋口長市先生著	意的生命論余の自學主義の教育	三、五〇、一四	佐藤龍治郎先生著	(其の三)國民教育の理想	一、五〇、一〇
樋口長市先生著	に立脚せる	三、五〇、一四	佐藤龍治郎先生著	(其の四)修身教授論、國語教授論、國史教授論	一、五〇、一〇
樋口長市先生著	生 活 教 育 學	二、三〇、二四	清原貞雄先生著	(其の五)誕生から大人になる迄	一、五〇、一〇
萩原 誠先生著	御大禮勅語解	一、五〇、〇八	佐藤小吉先生著	武士道史十講	二、〇〇、三三
萩原 誠先生著	朝見御儀勅語解義	七、〇六	金子健二先生著	日本の婦人	三、八〇、三三
福島政雄先生著	教育精神と體驗	二、〇〇、一〇	山崎英次郎先生著	言語哲學と言語共和國	二、五〇、一四
			山崎英次郎先生著	日本我教育	一、〇〇、〇八

大山幸太郎先生著	絕對運命の精神(前宇宙觀)	品切	上村福幸先生著	了解心理學	五、〇〇、三三
目黒編輯所編	小學校令並青年訓練關係法規	一、〇〇、〇六	大槻正一先生著	社會問題と道徳教育	一、四〇、三三
肥後盛熊先生共著	小學校令關係法例の詳説	二、八〇、一〇	今堀友市先生著	家庭教育の體驗を語る	二、三〇、三三
伊坂修一先生著	小學修身書の考察と其活用	二、〇〇、一〇	横山榮次先生著	新 教 育 論	品切
川島次郎先生著	教育生活と體驗	二、四〇、二四	横山榮次先生著	最近教育諸論	二、三〇、三三
齊藤兼雄先生著	實驗合科學習	一、九〇、一〇	横山榮次先生著	教授法思想の變遷	一、八〇、三三
池内房吉先生著	新學級經營要論	二、三〇、三三	木下竹次先生著	學 習 原 論	四、五〇、三三
植村光治郎先生著	純粹日本教育原理	二、三〇、三三	木下竹次先生著	學 習 各 論 上 卷	四、〇〇、三三
今宮千勝先生著	農 村 社 會 學	一、三〇、〇六	木下竹次先生著	學 習 各 論 中 卷	五、〇〇、三三
井森陸平先生著	英國に於ける現今の教育學説	二、五〇、〇六	木下竹次先生著	學 習 各 論 下 卷	六、〇〇、三三
生井武久先生著	歐米學校教育發達史	四、八〇、三三	小川正行先生著	最新教授學精義	三、八〇、三三
阿部重孝先生著	獨逸現代の教育思潮と制度	一、九〇、三三	小川正行先生著	獨逸に於ける新教育	二、五〇、一四
津田 榮先生著	教育者としてのフレイベル研究	二、〇〇、三三	小川正行先生著	家庭教育講話	二、八〇、一四
後藤眞造先生著	道 徳 哲 學	三、三〇、一四	小川正行先生著	ペスタロッチの生涯及事業	三、三〇、三三
松野義重先生著	現代國民禮法	一、八〇、三三	小川正行先生著	フレイベルの生涯及思想	二、八〇、一四

小川正行先生著	勞作教育論及教授法	三五〇、二四	小林佐源治先生著	尋三學級新經營案	三三〇、三
眞田幸憲先生著	新時代の教育	品〇切	小林佐源治先生著	尋四學級新經營案	二六〇、三
眞田幸憲先生著	公民教育資料	五〇〇、三	鹿兒島登左先生著	修身教育と生活指導	四〇〇、三
長澤末次郎先生著	自發的活動態度養成を基調としたる學習指導の實際	二八〇、三	鹿兒島登左先生著	生活指導と訓練の新研究	三三〇、三
長澤末次郎先生著	學習指導上より見たる環境整理の實際	二八〇、三	原房孝先生著	公民科教育の本質と概説	一四〇、二四
北澤種一先生著	作業教育序説	二三〇、三	坂本豊先生著	低學年教育原理尋一・二の學級經營	二二〇、〇六
北澤種一先生著	作業による陶冶の原理	一五〇、三	西晋一郎先生著	教の由つて生ずる所に立つ修身教育	一八〇、三
小林佐源治先生著	新複式教育	三五〇、三	野澤正浩先生著	人間性の修身教育	二七〇、三
小林佐源治先生著	學習訓練の新研究	二八〇、二四	稻宮榮次郎先生著	プラトンの教育學	二六〇、二四
小林佐源治先生著	自學中心學級經營の新研究	三五〇、二四	稻宮榮次郎先生著	ルソオの自然觀と教育説	二八〇、二四
小林佐源治先生著	自學中心新高等小學の學級經營	三四〇、二四	廣富榮次郎先生著	教育作用の本質	二八〇、二四
小林佐源治先生著	學校兒童圖書館經營	三〇〇、二四	岩瀬六郎先生著	修身教育の新體系	四三〇、三
小林佐源治先生著	尋一學級新經營案	二四〇、三	長田新先生著	獨逸だより(再遊記)	一八〇、三
小林佐源治先生著	尋二學級新經營案	三〇〇、二四	眞田幸憲先生著	最新公民教育、公民科教授の力	一九〇、二四

深作安文先生著	思想と國家	四〇〇、三	石山備平先生著	西洋教育史(第一卷)	五五〇、三
澁谷義夫先生著	主業修身教授原論	四五〇、三	久保良英先生著	心理學概説	一六〇、二四
小林・田中・稻次共著	修身・國語・算術地理・國史・理科	三六〇、二四	榑崎淺太郎先生著	補教育革新の本道(高橋の校長書)	二六〇、二四
川端太平先生著	家庭教育の根本問題	一〇〇、一〇	松本重敏先生著	國體正話	三〇〇、三
中島義之先生著	國體哲學	一〇〇、〇六	服部瀧先生著	ヒットラー運動と現狀	一八〇、二四
細谷俊夫先生著	教育環境學	二五〇、二四	磯野清先生著	日本武士道詳論	三八〇、三
吉田壽致先生著	倫理學原論	四五〇、三	加藤仁平先生著	山鹿素行の教育思想	二五〇、二四
吉田熊次先生著	教育及教育學の本質	一六〇、三	奈良國語學校	日本思想の精髓	三八〇、三
堀之内恒夫先生著	小學校を中心とせる我等の公民教育	三〇〇、三	小林巖先生著	環境に於ける教育の實際的研究	二八〇、二四
長倉燭介先生著	公民科の眞精神と其實際	四五〇、三	小林巖先生著	新時代の日本的修身訓練	三三〇、二四
長谷川藤太郎先生著	郷土教育原論	一五〇、一〇	平塚益徳先生著	舊約聖書の教育思想	二四〇、二四
長谷川藤太郎先生著	郷土教育即國民教育	二五〇、四	榑木師範學校	學習訓練の眞諦	一八〇、三
木下一雄先生著	希臘倫理史	三〇〇、三	森信三先生著	忠孝の眞理	二〇〇、三
西田宏先生著	全カント教育學	一四〇、三	吉田賢龍先生著	內的生命觀	一六〇、二〇
藤井種太郎先生著	カント倫理の批判	五〇〇、三	土井竹治先生著	新しい塾の教育	一八〇、二〇

阿部仁三先生著 現代とシニプランガの文化 教育學 一、八〇、一四	熊井甚太郎先生著 細目式修身科指導書 二、八〇、一四	飯田恒作先生著 細目式讀方科指導書全二冊 二、八〇、一四	飯田恒作先生著 細目式綴方科指導書 二、五〇、一四	高木佐加枝先生著 細目式算術科指導書全二冊 二、八〇、一四	高木佐加枝先生著 細目式地理科指導書 一、三〇、〇八	佐藤保太郎先生著 細目式國史科指導書 一、三〇、〇八	堂東傳先生著 細目式理科指導書 一、三〇、〇八	井上武士先生著 細目式唱歌科指導書 一、六〇、〇八	齋藤兼雄先生著 細目式體操科指導書 一、六〇、〇八	三吉正雄先生著 細目式手工科指導書 一、六〇、〇八	伊藤信一郎先生著 細目式圖畫科指導書 一、七〇、〇二	佐々木由子先生著 細目式裁縫科指導書 九〇、〇六	【細目式各科指導書】 科目別用 各、四〇、〇二	【現代教育問題精選】 海後宗臣先生著 クリークの教育哲學 六〇、〇六	石谷信保先生著 ルプト教育學の根本問題 六〇、〇六	飯田晃三先生著 ドウクローリ教育法 六〇、〇六	伏見猛彌先生著 陶冶と世界觀 六〇、〇六
---	----------------------------------	------------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	----------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	---	---------------------------------	-------------------------------	----------------------------

阿部仁三先生著 現代とシニプランガの文化 教育學 一、八〇、一四	熊井甚太郎先生著 細目式修身科指導書 二、八〇、一四	飯田恒作先生著 細目式讀方科指導書全二冊 二、八〇、一四	飯田恒作先生著 細目式綴方科指導書 二、五〇、一四	高木佐加枝先生著 細目式算術科指導書全二冊 二、八〇、一四	高木佐加枝先生著 細目式地理科指導書 一、三〇、〇八	佐藤保太郎先生著 細目式國史科指導書 一、三〇、〇八	堂東傳先生著 細目式理科指導書 一、三〇、〇八	井上武士先生著 細目式唱歌科指導書 一、六〇、〇八	齋藤兼雄先生著 細目式體操科指導書 一、六〇、〇八	三吉正雄先生著 細目式手工科指導書 一、六〇、〇八	伊藤信一郎先生著 細目式圖畫科指導書 一、七〇、〇二	佐々木由子先生著 細目式裁縫科指導書 九〇、〇六	【細目式各科指導書】 科目別用 各、四〇、〇二	【現代教育問題精選】 海後宗臣先生著 クリークの教育哲學 六〇、〇六	石谷信保先生著 ルプト教育學の根本問題 六〇、〇六	飯田晃三先生著 ドウクローリ教育法 六〇、〇六	伏見猛彌先生著 陶冶と世界觀 六〇、〇六
---	----------------------------------	------------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	----------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	---	---------------------------------	-------------------------------	----------------------------

村上俊亮先生著	陶冶の基本問題	六〇、六		
中島太郎先生著	學級編成の諸問題	六〇、六		
渡邊富三郎先生著	學級の社會學的研究	六〇、六		
石谷信保先生著	教育指導綱要	六〇、六		
神山義雄先生著	教育に於ける遊戲の地位	六〇、六		
村上俊亮先生著	學校教育の心理	六〇、六		
【道徳教育叢書】				
嘉納治五郎先生著	精力善用論	近刊		
互理章三郎先生著	皇國	日本	一六〇、〇	
吉田靜敬先生著	現代社會と人格生活	一六〇、〇		
荻原 漢先生著	皇國の行くべき道	一五〇、〇		
由良哲次先生著	人生觀の問題	一六〇、〇		
大杉重一先生著	詔勅謹解	一六〇、〇		
馬場文翁先生著	佛敎倫理	一五〇、〇		
【教授書】				
川島次郎先生著	小學修身指導書	第一用 第二用	三〇、〇〇	二六、〇〇
川島次郎先生著	修身教授書	訂主としたる	五十四上 三三下	一六、六六
垣内松三先生著	國語讀方教授の理論と實際		七、八	二、三〇
原田直茂先生共著	新小學國語讀本模範指導書		一、二	一、四

田上新吉先生著	小學國語讀本教授詳案	一、二		
田上新吉先生著	訂高等小學讀本教授書	一、二		
原田直茂先生著	小學國語讀本挿繪の解説と取扱	六、五	一、〇〇、〇六	
田中豐太郎先生著	改正小學讀本の實際的取扱	一、四		
丸山林平先生著	文に即 尋四の讀方教育	二、七〇	一、四	
宮川菊芳先生著	文に即 尋五の讀方教育	三、八〇	一、三	
同	表現を尋六の讀方教育	三、〇〇	一、三	
山本孫一先生共著	日案新小學算術模範指導書	一、上	近二、二〇〇	
山本孫一先生著	尋常新算術取扱の實際	三、三三	一、四	
中野恭一先生著	高等新算術取扱の實際	五、二一	三、〇〇、〇三	
山本松七先生共著	尋一新算術の教育	下上	一、三〇〇、一〇	
岩下吉衛先生著	國定算術書に現れたる附補充問題	六、二	二、〇〇、〇二	
吉田弘先生共著	新理科教育の實際	六、五	二、二六、〇〇	
堂東 傳先生著	新理科教育の實際	六、五	二、二六、〇〇	
山田義直先生著	小學國史教授書	六、五	一、七〇〇、〇三	
田上新吉先生著	級方指導體系	六、五	一、〇〇〇、〇八	
田中豐太郎先生著	級方教育の記録	六、五	一、〇〇〇、〇〇	
荒井庚次先生著	小學校補習學校農業科教授資料大集成	特價七、五〇	三、〇〇	
神田正伸先生著	國定理科書教材精説	六、五	一、九〇〇、〇〇	
高橋嘉藤治先生著	新原理に算術學習指導案	第二	一、五〇、〇四	
湯川征吉先生著	最新商業教材と其取扱(上巻)		四、二〇、〇三	
限江信光先生著	精説地理教材の吟味と敷衍		五、〇〇、〇三	
附屬小學校編	各科教授案例		三、〇〇、〇四	

【國語】

岩城準太郎先生著	新講日本文學史	二、八〇、三	大塚治六先生解説	行成卿かな帖	二、五〇、三
岩城準太郎先生著	國文學の諸相	五、〇〇、三	勝峯月溪先生著	女子手紙の手本	一、〇〇、六
鈴木敏也先生著	漱石草枕評釋	三、〇〇、四	森本角藏先生著	古文書學概論	二、〇〇、三〇
鈴木敏也先生著	細口たけくらべ評釋	二、六〇、四	森本角藏先生著	四書索引	三、〇〇、六〇
鈴木敏也先生著	近代國文學素描	四、〇〇、三	佐藤末吉先生著	五經索引	三、〇〇、六九
柿村重松先生著	倭漢朗詠集考證	一、〇〇、三〇	石橋健夫先生著	日本女流文學史	一、五〇、二
柿村重松先生著	新撰倭漢朗詠集要解	三、〇〇、四	徳田浮先生著	原始國文學考	二、五〇、二
高田邦彦先生著	國語教育の根本問題	品切	水野平次先生著	白樂天と日本文學	四、五〇、二四
石黒魯平先生著	國語教育の音聲學	品切	木枝増一先生著	高等口語法講義	七、五〇、三〇
野澤正清先生著	讀方教授の一進展	品切	兒島獻吉郎先生著	支那諸子百家考	三、二〇、二四
河野伊三郎先生著	文の國語學習品切	品切	辻本兵一郎先生著	習字教育詳説	二、八〇、二四
飯田恒作先生著	綴方指導の組織と實際	三、〇〇、三	辻本兵一郎先生著	魂の書方教育	三、四〇、二四
志村春方先生著	かなの手ほどき	一、〇〇、六	本庄精次先生外七十二名協定	小學校用書方スケール	三、二〇、二四
			秋田喜三郎先生著	讀方教育の新相	二、八〇、二四

岩城準太郎先生著	國語讀本	二、三〇、一〇	水戸部寅松先生著	補習ペン練習帖	四、五〇、三
岩城準太郎先生著	歴代國文解釋	二、五〇、一〇	水戸部寅松先生著	毛筆書法及び教授の實際	四、〇〇、三
丸山林平先生著	新國文學史綱要	一、五〇、一四	五味義武先生著	讀方教授の刷新	五、〇〇、三
丸山林平先生著	生活表現と綴方指導	三、〇〇、三	五味義武先生著	綴方教育の刷新	五、五〇、三
丸山林平先生著	讀方教育の本質	二、五〇、三	田中武烈先生著	實踐讀み方教育	三、八〇、二四
丸山林平先生著	讀方教育體系	四、〇〇、三	目黒書店編輯所	名家書道鑑	各二、〇〇、各二、四
千葉春雄先生著	表現の讀み方	二、八〇、三	松浦伯爵家所藏諸橋派水先生解説	五首一紙	特一、〇〇、二四
千葉春雄先生著	兒童の生活に即したる綴方と其鑑賞	二、〇〇、三			
田上新吉先生著	力の讀方教育	四、五〇、三			
田上新吉先生著	綴方指導原論	三、六〇、一四			
田上新吉先生著	生命の綴方教授	四、五〇、三			
原田直茂先生著	讀方教育の本領	四、三〇、三			
宮川菊芳先生著	國語讀本の鑑賞的取扱	二、七〇、三			
田中野太郎先生著	生活綴方の教育	二、八〇、一四			
水戸部寅松先生著	修硬筆書法及教授の實際	三、五〇、一四			

【數學】

北條時重先生著	一般商業數學	五、〇〇、三
武井勇喜先生著	小學新算術	品切
佐藤充先生著	新主義數學を空間教授の取扱	二、五〇、二四
中野恭一先生著	基調とせる	二、五〇、二四
藤本清先生著	新主義にメトリル理論及實際	一、九〇、〇八
池内房吉先生著	教科書の尋三算術指導要訣	一、三〇、一〇
同	教科書の尋四算術指導要訣	一、五〇、一〇

藤原安治郎先生著	生活と数理の關聯に立つ國數觀念の指導法	三、〇〇、二、四	山本孫一先生著	國定便法暗算の系統と其指導	一、九〇、一、四
肥後盛熊先生著	新算術教授	四、五〇、三	山本孫一先生著	系統的暗算指導指針	一、五〇、三
山本松七先生著	小算術の考察と系統と指導	二、九〇、一、四	古川正登先生共著	國定新珠算書の精神と指導の實際	一、四〇、三
銅鳥信太郎先生著	新三角法初歩	二、〇〇、八	山本孫一先生共著	國定新珠算書の精神と指導の實際	一、四〇、三
銅鳥信太郎先生著	數學教育の革新品	二、三〇、二	中野恭一先生著	國定新珠算書の精神と指導の實際	一、四〇、三
銅鳥信太郎先生著	數學教育の諸斷面	二、五〇、二	同	國定新珠算書の精神と指導の實際	一、四〇、三
銅鳥信太郎先生著	數學教育の進歩	二、三〇、二	水戸部寅松先生著	精説珠算教授真義	三、八〇、一、四
銅鳥信太郎先生著	數學教授法	三、五〇、三	清水甚吾先生著	實驗實測 算術の自發學習指導法	三、〇〇、一、四
佐藤良一郎先生著	初等數學教育の根本的考察	一、七〇、〇、八	清水甚吾先生著	算術の新系統と指導の實際	二、八〇、一、四
佐藤良一郎先生著	小學校算術教育上の諸問題	二、八〇、一、四	清水甚吾先生著	算術の新系統と指導の實際	二、八〇、一、四
佐藤良一郎先生著	正教授要目と數學教育	三、八〇、一、四	清水甚吾先生著	算術の新系統と指導の實際	二、八〇、一、四
山本孫一先生著	小學校の算術に導入すべきグラフと其の取扱の實際	二、〇〇、一、四	關根忠先生著	算術教育(第一編)の實際	各、五〇、〇、四
山本孫一先生著	新しい算術と八ヶ年教育	二、五〇、一、四	關根忠先生著	世界各國數學教育の變動と勢	一、八〇、一、四
山本孫一先生著	代數的解方指導の實際	二、〇〇、一、四	關根忠先生著	算術教育の變遷と勢	一、八〇、一、四
山本孫一先生著	書換へ應用問題取扱の實際	二、七〇、一、四	關根忠先生著	算術教育の變遷と勢	一、八〇、一、四

堂東 傳先生著	小學校に於ける理科設備の實際	一、五〇、〇、八	山根教美先生著	自然科教授の實際的研究	二、〇〇、一、〇
堂東 傳先生著	新理科教育	三、〇〇、一、四	中野恭一先生著	發明發見物語	三、二〇、三
堂東 傳先生著	統合理科教育	三、二〇、一、四	桑原理助先生著	教科の本質教材の理科指導の系統	二、三〇、二
堂東 傳先生著	動物學精義	上各卷論 一、〇〇〇、三、八	橋本爲次堂東傳	數表理科教材便覽	一、四〇、〇、八
堂東 傳先生著	動物學精義	中各卷論 一、一〇〇、三、八	高木佐加枝岸一敏	本位理科教材便覽	一、四〇、〇、八
堂東 傳先生著	動物學精義	下各卷論 一、五〇〇、三、八	久米道民先生著	植物顯微鏡實習	二、八〇、一、四
同	動物學精義	各卷論 一、一〇〇、三、八	吉田 弘先生著	小學理化實驗圖說集成	三、八〇、一、四
同	動物學精義	各卷論 一、一〇〇、三、八	理科研究會編	理科教育研究(自第一輯至第三輯)	各、五〇、各、〇、四
坂部重壽先生著	有機化學綱要	三、〇〇、一、四	小林信三先生著	仔犬の育て方	三、〇、〇、四
永海佐一郎先生著	小學校化學教材の根本及其解説	品 切	小林信三先生著	犬の訓練	四、五、〇、四
木下龜城先生著	岩石鑛床の顯微鏡研究	四、〇〇、一、四	小林信三先生著	名犬圖鑑	五、五〇、三
神戶伊三郎先生著	學習理科の新指導法	三、五〇、三	大浦茂樹先生著	小學校に於ける理科藥品精説	二、〇〇、一、〇
神戶伊三郎先生著	幼學年理科教育の實際	三、四〇、三			
橋本爲次先生著	理科教育の組織的研究	四、五〇、三			

【 雜 】

【地理・歴史】

地理教材研究会編	地理教材研究	八七種各二〇冊 九十九種各二〇冊 十二種各二〇冊 十三種各二〇冊 十五種各二〇冊 七四〇〇〇冊 一四
田中啓爾先生著	地理教育に關する論文集	一、五〇、一四
田中啓爾先生著	史料の日本歴史	四、〇〇、三
富士徳治郎先生著	訂世界交通地理概論	四、五〇、三
森本角藏先生著	鮮・滿・支那 とどこどこ 雲烟過眼日記	二、〇〇、〇
武井群嗣先生著	海の彼方を品切	二、八〇、二四
淺井治平先生著	自然地理學の基礎的知識	三、〇〇、二四
淺井治平先生著	人文地理學の基礎的知識	三、〇〇、二四
齋藤英夫先生著	時勢に地 理教授	一、八〇、〇
大松庄太郎先生著	生の國史學習の提唱	四、五〇、三
大松庄太郎先生著	更新國史教材の取扱	三、二〇、二四
大松庄太郎先生著	最近國史の郷土的教育	一、八〇、三

八七種各二〇冊
九十九種各二〇冊
十二種各二〇冊
十三種各二〇冊
十五種各二〇冊
七四〇〇〇冊
一四

福島政雄先生著	古希臘文明の跡をたづねて	一、五〇、〇六
木下一雄先生著	西洋家族史	一、五〇、〇八
山田義直先生著	國史教材の觀方	二、二〇、一〇
山田義直先生著	日本精神の一貫と國史教育	二、七〇、二
隈江信光先生著	最新地理教育の理論と方法	三、三〇、三
歴史研究会	新東洋史讀本	二、〇〇、二
歴史研究会	新西洋史讀本	一、五〇、二
附屬中學校編	我が校の修學旅行	一、二〇、一〇
山本幸雄編	中等學校に於ける 地理科の重要問題	八、五〇、〇四
齊藤斐章先生著	西洋國民史上卷	五、八〇、三
時野谷常三郎先生著	歐洲史蹟觀	三、四〇、二
高尾常磐先生著	國家地理學概論	三、〇〇、二
橋川正先生著	綜合日本佛教史	五、八〇、三〇
聖文學院大學 地理學年報編輯所	地理學年報 (第一輯) (第二輯)	一、八〇、二 二、八〇、二四
森本角藏先生著	日本年號大觀	一、五〇、〇三

【圖畫・手工】

矢野仁一先生著	滿洲國歴史	二、五〇、二四
矢野仁一先生著	國民東洋史大綱	一、九〇、二四
鶴居滋一先生著	史的觀點 に立つ日滿關係と地理教育	三、七〇、二四
徳重淺吉先生著	維新政治宗教史研究	六、〇〇、三
大竹拙三先生著	畫家の兒童畫觀	品切
大竹拙三先生著	新制小學手工科經營の實際	二、二〇、一〇
横井曾一先生著	美術クレヨン染と版畫	一、二〇、〇六
横井曾一先生著	手製で 出来る油繪學習の實際	二、〇〇、〇八
横井曾一先生著	小學校に 於ける手工設備の實際	一、五〇、二
板倉贊治先生著	テーパー畫集 第二輯	一、二〇、〇八
同	テーパー畫圖案集	一、五〇、〇八
三苦正雄先生著	湖造形美育體系	三、六〇、二四
三苦正雄先生著	標準手工教授細目の理論と實際	近刊

【音樂】

伊藤信一郎先生著	尋常新圖畫教育の實際 第一用	三、四〇、二四
山本壽先生著	音樂の鑑賞教育	品切
山本壽先生著	音樂教育の三大方面	四、五〇、三
山本壽先生著	由來 附記 世界國歌集	二、〇〇、一〇
小松耕輔先生編	中等唱歌名曲集	一、三〇、二
小松耕輔先生編	小松耕輔歌曲集 自第一集 至第三集	各、五〇、〇四
戸倉ハル先生著	子供の ためのピアノ小曲集	一、五〇、一四
梁田貞先生共 奥野庄太郎先生著	唱遊戲	一、四〇、〇六
松岡敏幸先生譯	全 譯 コールユーブンゲン	一、五〇、一四
梁田貞先生著	梁田貞歌曲集 自第一集 至第五集	各、五〇、〇四
小松耕輔先生著	大正少年唱歌(全十二集)	各、二五、〇二
梁田貞先生著	大正少年唱歌(全十二集)	各、二五、〇二
葛原尚先生著	大正幼年唱歌(全十二集)	各、二五、〇二

竹内 一先生著	體育運動傷害の應急手當法	二四〇、一〇	小笠原道生先生著	體育生理學要綱	三〇〇、二四
大日本バスケットボール協會編	バスケットボール競技規則 (昭和十年度)	五〇、〇四	アマリカンフットボール研究會編	アメリカンフットボール	二〇〇、一〇
文部省編	現代體育の施設と管理	三二〇、三三	佐々木等先生共著	學校に於ける球技指導の實際	二〇〇、三三
森傳次郎先生著	フニルス基本體操と其批判	二四〇、一四	安川伊三先生著	籠球競技法	三〇〇、二四
廣井家太先生共著	現代の學校教練	三〇〇、三三	戸倉ハル先生著	唱歌遊戯	一四〇、〇六
川口英明先生著	新しい學校遊戯	二五〇、二二	藤山快隆先生著	學校遊技	二二〇、三三
川口英明先生著	運動會の體操遊戯	五二〇、三三	中島海先生著	小學校に於ける巧緻運動品切	二八〇、一四
岡部平太先生著	世界の運動界	二七〇、二二	中島海先生著	小學校の遊戯	二八〇、一四
岡部平太先生著	陸上競技史	二二〇、二二	廣瀨海先生著	新要目體操科教授の實際	二〇〇、〇六
三浦ヒロ先生著	小學校行進遊戯の材料と(上)に於ける其指導法(下)	二八〇、一四	廣井家太先生著	姿勢教育	三〇〇、三三
佐藤信一先生著	陸上競技學級指導法	一八〇、二二	マツケンヂ博士共著	歐米體育史	三〇〇、一四
大谷武一先生共著	體育學精義	四八〇、三三	體操研究會編	文部省新制學校體操教授要目	三〇〇、〇三
都築重雄先生共著	小學校體操讀本	二五〇、一八	松井三雄先生著	體育心理學	二五〇、一四
香山龍藏	陸上競技學級指導法	一八〇、二二			
谷池茂雄共著	陸上競技學級指導法	一八〇、二二			
川島恒吉著	陸上競技學級指導法	一八〇、二二			
木下東作先生共著	陸上競技學級指導法	一八〇、二二			
寺岡英吉先生共著	陸上競技學級指導法	一八〇、二二			

岡本規矩男共著	體育の基準に関する研究	二〇〇、一四	廣部賢二先生譯	邦譯新ゴルフルール	二〇〇、〇四
西山富吉共著	ラグビーフットボール	三八〇、三三	大谷光明先生著	ゴルフ規則註釋と判例	三八〇、二四
香山 壽先生著	丘陵スキー術	一七〇、三三	中島太郎先生著	排球競技指導法	二四〇、一四
吉井修七先生著	新しいスキー術	二七〇、一四	山田午郎先生著	フットボールスコアブック	四五〇、〇四
竹節作太先生著	スキー登山	一三〇、三三	同	バスケットボールスコアブック	四五〇、〇四
舟田三郎先生著	登山	一三〇、三三	同	蹴球のコーチと練習の秘訣	一七〇、二〇
舟田三郎先生著	登山	一三〇、三三	同	水泳指導要項	二四〇、一四
鈴木 勇先生著	登山カード	五〇、〇四	同	水泳指導標準泳法	三〇〇、〇三
黒田正夫先生著	登山カード	五〇、〇三	同	水泳指導標準泳法	三〇〇、〇三
宮畑虎彦先生著	登山カード	五〇、〇三	同	水泳指導標準泳法	三〇〇、〇三
小笠原勇八先生著	登山カード	五〇、〇三	同	水泳指導標準泳法	三〇〇、〇三
全日本陸上競技聯盟編	ポケットフィルムセリフズ	一五〇、一〇	伊澤エイ先生著	體育ダンス	二八〇、三三
針重敬喜先生著	日本のテニス	三三〇、一四	伊澤エイ先生著	體育ダンスと唱歌遊戯	三八〇、三三
太田芳郎先生著	新しい庭球術	二二〇、一四	上田精一先生著	陸上競技練習法	一八〇、一四
白石多士良先生著	正しいゴルフ	三八〇、一四	高木武夫先生著	體操競技	二四〇、一四
近藤 經一著	ダウン・ザ・フェアウェイ	二八〇、二二	寺澤 嚴男著	體育論文集	三三〇、三三
			大宮文右衛門著		
			二宮文右衛門著		
			寺澤 嚴男著		
			大宮文右衛門著		

澁井二夫先生共著 寺谷朝藏先生共著	要目 體育ダンスの指導	三、五〇、一〇
二宮文右衛門著 今村嘉雄著 大石峯雄著	體育の本質と表現體操	二、〇〇、一四
二宮文右衛門先生著	エリ・ピヨル クステンンの學校體操	二、二〇、一〇
宮田覺造先生著	體操科の指導	一、七〇、一四
宮田覺造先生著	體育運動經營原論	二、七〇、一四
同	我國體操	四、八〇、一八
全日本體操聯盟編	體操競技種目並解説	八、〇〇、〇六
森秀先生著	兒童期の體育	二、〇〇、一四
文部省體育課編	要目 活目 體操教材の解説	一、八〇、一〇
西尾重喜先生著	ラグビー 正しき戦法及 練習法と觀方	一、八〇、一三
長田博先生著	女子律動體操	一、八〇、一四
安田弘嗣先生著	學校競技指導精神	二、九〇、一四
櫻庭武先生著	柔道史攷	二、〇〇、一〇

【全日本體操聯盟制定健康體操】		
1 初等用體操	(國民保健體操)	〇、一〇、〇三
2 初等部體操	(小學校初等用)	〇、一〇、〇三
3 初等部合同體操	(初歩の學校)	〇、一〇、〇三
4 中等部男子用體操	(男子中等學校)	〇、一〇、〇三
5 中等部男子用體操	(男子中等、青年)	〇、一〇、〇三
6 中等部合同體操	(男子中等學校)	〇、一〇、〇三
7 中等部女子用體操	(女子中等學校、女子青年)	〇、一〇、〇三
8 中等部女子用體操	(女子中等學校、女子青年)	〇、一〇、〇三
9 中等部合同體操	(女子中等學校、女子青年)	〇、一〇、〇三
10 高等部男子用體操	(大學、高等)	〇、一〇、〇三
11 高等部女子用體操	(大學、高等女子)	〇、一〇、〇三
12 民衆體操(一)	(一般民衆、工場、會社)	〇、一〇、〇三
13 民衆體操(二)	(一般民衆、工場、會社)	〇、一〇、〇三
14 民衆體操(三)	(一般民衆、工場、會社)	〇、一〇、〇三
15 國民ダンス(一)	上州小唄踊	〇、一〇、〇三
16 國民ダンス(二)	木曾節踊	〇、一〇、〇三

17 國民ダンス(三)	伊那節踊	〇、一〇、〇三	藤山快隆先生著	第十一編	訂改	バスケットボール	二、四〇、〇八	
18 中等用體操	(國民保健體操)	〇、一〇、〇三	佐藤三郎先生著	第十二編	訂改	水泳	一、八〇、〇六	
19 中等部合同體操	(中學校)	〇、一〇、〇三	笹川速雄先生著	第十三編	訂改	スキーイング	二、〇〇、〇六	
20 女子保健體操		〇、一〇、〇三	太田芳郎先生著	第十四編	訂改	テニス	一、五〇、〇六	
【日本體育叢書】								
佐々木等先生著	第一編	訂改	ランニング	一、〇〇、〇六	今村安先生著	第十七編	馬術	一、八〇、〇六
同	第二編	訂改	ジャムピング	一、〇〇、〇六	工藤一三先生著	第十八編	柔道	一、五〇、〇六
同	第三編	訂改	フットボール	一、〇〇、〇六	上田精一先生著	第十九編	スローイング	一、八〇、〇六
村尾圭介先生著	第四編		弓道	二、二〇、〇八	小林信三先生著	第二十篇	銃獵と犬	一、八〇、一四
橋戸信先生著	第五編		野球	三、〇〇、一四	【兒童書類】			
増田健三先生著	第六編		キヤムピング	一、八〇、〇六	廣瀨清先生著	修身	鹽原多助	一、二〇、〇六
渡邊勇次郎先生著	第七編		ボクシング	一、五〇、〇六	廣瀨清先生著	修身	義人茂左衛門	一、二〇、〇六
佐藤卯吉先生著	第九編		劍道	一、八〇、〇六				
川口英明先生著	第十編	訂改	ヴァレーボール	一、三〇、〇六				

